

---

# 童話な僕とメルヘンの君

狼野郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

童話な僕とメルヘンの君

### 【Nコード】

N2828H

### 【作者名】

狼野郎

### 【あらすじ】

ここは、メルヘンの国の住民たちが住むメルヘン島・・・うんまあまんまなんだけどねそこは、つつこまないでつつこんだら負け的な（笑）ってことですねこの島には、たくさん童話のキャラ達が住み仲良く暮らしていた。そんな島に4人の仲良しかつ時には、いやいやさすがにそれは、無謀だろう的な大チャレンジもやってしまってお茶目かつ少し無謀な4人組がいた。そのメンバーは、シンデレラ、ヘンゼル、オオカミ（赤頭巾に出てくる）、浦島太郎の4人である。そして今かれら4人による大冒険の火ぶたが切って落とさ

おもしろくない...

## 第一話「メルヘンの国」

プロローグ（もといあらすじ）

ここは、メルヘンの国の住民たちが住む　メルヘン島・・・うん  
まあ　まんまなんだけどね　そこは、つつこまないで　つつこんだ  
ら負けたな（笑）　って　ことですね　この島には、たくさん  
の童話のキャラ達が住み　仲良く暮らしていた。　そんな島に4人  
の仲良しかつ時には、いやいやさすがにそれは、無謀だろう的な大  
チャレンジもやってしまう　お茶目かつ少し無謀な4人組がいた。  
そのメンバーは、シンデレラ、ヘンゼル、オオカミ（赤頭巾に出  
てくる）、浦島太郎の4人である。そして今かれら4人による大冒  
険の火ぶたが切って落とされようとしていた！！

第一話　「メルヘンの国」

今日も平和なメルヘンの国　そこでいつものごとく4人は、仲良し  
げに話していた。

「ってかさ　なんで俺以外みんなグリム童話のキャラなのに俺だけ  
日本昔話のキャラなわけ？　しかも浦島太郎って？！　せめて桃  
太郎とかにしようよ　浦島太郎って亀助けて竜宮城行った以外は、  
何のとりえもないただの人じゃん！！」

「いやいや　浦島　お前まだましだろ　俺なんて　狼だぜ　本編で  
は、思いつきり悪役やん」

「まあまあ　細かいことは、いいじゃん　2人とも　ってか　あんな  
ま　本編とかそういうの言うのはよそうよ　ってか君達いきなりこ  
の小説に対して愚痴を言うなよ」

2人をなだめようとするヘンゼル　ちなみに彼の妹グレーテルは、  
彼女と同じ年くらいの子たちと遊んでいます。　やっぱり童話の子た  
ちも同じ年くらいの子と遊びたいでしょうし　いくら仲が良くても

いつも兄弟一緒ってわけでは、ないんですね 自立ってやつですかね。・・・

「そうよ 2人とも あんまりとやかく言つと この毒りんごをお見舞いするわよ!!」

「いやいや おかしい おまえ シンデレラじゃん! 毒りんごって白雪姫に出てくるアイテムだし 第一魔女が使うアイテムじゃん!」

シンデレラの言葉にすかさず つっこむ浦島

「ふふふ 私の辞書に不可能の文字は、ありません」

浦島の問いに答えつつナポレオンのようなポーズをとるシンデレラ。(その後もこの4人の会話は、続くわけですが それをすべて書く)とそれだけで第一話終わってしまうので ここはここらでストップ。

3時間後、まだやいやい言ってる4人組のところに手紙が届けられた。

「シンデレラ様 王様からのお手紙ですよ」

シンデレラのパシリ・じゃなくてお友達のネズミ、チュー太郎君が一通の手紙を持ってシンデレラのところに来てきました。

「あら ありがと お友達A」

「いやいや せめて 名前で呼んだあげよう いくら脇役でもチュ

ー太郎って名前がちゃんとおあるんだから」

浦島のつつこみを無視し手紙を読み始めるシンデレラ

「あら 王様が私たちに話があるそうよ めんどくさいけど あとで 王様にケータイで電話しときましよう」

「そこは、王様直々の御呼ばれなんだから 城まで行こうよ ってかおとぎ話のキャラが何でケータイ持つてんの!？」

そんな 浦島のつつこみをまたまた無視と言いたかったのですがヘンゼルやオオカミも浦島と一緒に 行ったほうがいいよというものですから さすがのシンデレラもしぶしぶ行くことになりました。(ちなみに ケータイに対してのつつこみは、無視しました)

「まあ じゃあ王様の城まで結構距離あるしこれに乗って行きましょ」

「わゝ もしかしてシンデレラだけにカボチャの馬車？乗ってみたかったんだ」

ヘンゼルの期待をよそにシンデレラが差した先にあったのは、普通に車 しかも高級車<sup>ポルシェ</sup>

「うん もう どうでもいいや」さすがにつっこみ疲れた様子の浦島がぼつりと言いました。

さてさて というわけで なんだかんだで城に着いた 4人組 王様の前へと歩いていきます。

「はゝゝい 来たわよ 王様 略して王ちゃん」

「おまえ 敬意をはらうって言葉わかる?? ってか 王ちゃん は、よそう なぜか ホームラン王を予想させる」

相変わらずのシンデレラに車で休んで少し元気になった浦島がつっこみます。

「うむ・・・ まあ シンデレラのその性格は、今になって始まったことでは、ないからのう・・・まあ それは、それとして本題にはいる 実は、最近東京という国に 悪い魔王が出没してのう その魔王のせいで魔物が増え東京に住む人々が苦しんでいると耳にした そこでお前たち 4人が その魔王を退治してきては、くれんかのう??」

王様がいました。

「いやいや 王様もおかしい さっきも言ったけど 俺 亀助けただけの ただの青年です んで ヘンゼルは子供だし シンデレラは、いちおう姫 オオカミにいたっちゃ喋れるってだけで獣ですよ??」

「まあ それは、わかっておるのじゃが お前たちは、なんでも今までもいろんなチャレンジをして それをこなしていったと聞く今回も大丈夫じゃろう」

浦島の言葉をいともあっさり返す王様。

「そんな〜 怖いですよ 王様〜 僕なんて チャレンジって言うても ピンポンダッシュがやつとの男ですよ〜」

今度は、ヘンゼルも王様に文句を言うが 王様が東京という国の民のためじゃとしつこく言うもんだからシンデレラを除く3人は、しぶしぶOKしました。

そしてシンデレラは、というと

「王様 それつてももちろん成功したあかつきには、ご褒美ありますよね??」

なんてことを言い続けるもんですから 王様も

「しょうがない 東京の民を救ったあかつきには、望みのものを何でもひとつお前たちに授けよう」

なんてことを言いました。

これを聞いた シンデレラは、やる気まんまん すぐさま ほかの3人に出発の準備をするよう命令し 自分も一度家に帰り 支度をしてから また城に行きました。

「それでは 王様 われら4人 魔王退治に行つてまいります!」  
浦島もこうなつては、しょうがない 行くからには、必ず魔王を倒すと意気込んでいます

「本当にありがとう これは、わしがお前たちに贈る贈り物じゃ」  
そう言うと 王様は、4人に100Gと布の服、旅人の剣（木製）を渡しました。

「うわ〜 ありがとう王様」

素直に礼をいうヘンゼルをよそにシンデレラは、

「ってか一国の王様が魔王退治に行かすのに渡す装備が 木のできた剣と 布の服 さらに100G（1Gは1円と同じ価値）っておかしくない? 遠まわしに死んで来いってこと?? ってか布の服ってなに? いま私たちが着てる服は、すでに布製よ ってか私にいたっちゃ シルクのドレスよ なんていまさら こんなダサイ服着なきゃいけないの??」

さんざん言う シンデレラでしたが 浦島も今度ばかりは確かにと

思うところがあつたので つっこみませんでした。・・・  
とにかく 長らくお待たせしましたが 今4人の旅は、始まりを迎  
えました。(オオカミは、動物だから3人と1ぴきじゃんとかいう  
つっこみは、やめてね by ヘンゼル)

続く

## 第二話（旅の始まり）

### 第二話（旅の始まり）

「ってかさ〜 なんで 私たち こんな一度はいつたら二度と出られないような 森なか歩いてんの？」

王様に命じられ東京という国にいるといわれる魔王を倒すため 東京へ向かう4人（シンデレラ、ヘンゼル、オオカミ、浦島太郎）でしたが その道中に森がありそこを通らなければ 東京には、着かないというので 仕方なく歩いていたわけですが 歩き始めて10分でもうシンデレラはご立腹のようです。

「仕方だろ〜 シンデレラ ここ通ないと東京に着かないんだからさ〜」

ぶーぶー言ってるシンデレラにオオカミが言います。

「む〜 オオカミのくせに〜 つかあんた前回ぜんぜんセリフなかったくせに生意気よ だいたいなんであんた二足方向なのよ？ オオカミだつたら私を背中に乗せて歩くくらいしなさいよ」

「うるさいわ〜 俺のセリフが前回少なかったのは、作者のせいだ俺のせいじゃね〜よ 今回からは、俺もガンガン話すからな！」

「2人とも 疲れてるからって いらいらすんなよ とりあえず さつさとこの森抜けたいんだから さつさと歩け！」

浦島が2人のけんかを止めようとしますが 次の一言で 浦島もこの喧嘩に参加してしまいます。

「うるさいわよ 万年つつこみ！！」

「な、なんだと〜 つつこみなめんな〜！！！！」

浦島とシンデレラさらには、オオカミが取っ組み合いのけんかを始めてしまったころヘンゼルは、一人黙々と森を抜けるためのルートを考えています。

(2時間後) やつと3人のけんかは、落ち着き また4人で歩き始めます。

「は、それにしても疲れたわ、オオカミと浦島が喧嘩なんかさせるから余計にね。」

「うん 誰のせいでもけんかになったか考えようね それにしても 本当になかなか この森を抜けることができないな、どつかで休憩でもしたいところだけど・・・」

浦島はあたりを見渡しますが休めるようなところは、ありません。その時です 浦島、シンデレラ、オオカミよりはるか先を歩いていった

ヘンゼル が何かを見つけたのか こっちに向かって何か叫んでいきます。

「どうしたんだよ ヘンゼル??」

浦島たちがヘンゼルに近寄りながら言います。

「ほら あそこになんか家が建ってるんだ」

ヘンゼルが差した先には、小さいが確かに家があります。

「やった ちょっと休ませてもらおうぜ」

オオカミは、家を見るなり 元気満タン さつさと走って家の前まで行き ドアを叩きます。

「すいません 旅の者ですがちょっと休ませて下さい」

ガチャ ドアが開くなり オオカミのほうに飛んできたのは、鉛玉。その球を何とかかわすオオカミですが家から出てきた お爺さんは、ライフルを構えていて いまにも もう一発をぶっ放しそうな気迫で迫ってきます。

「この オオカミめ わしらの命を狙うつもりじゃな しかも いやべっているなんて お前魔物の手先か??」

「いやいや まて 俺は、魔王倒すために旅してる いわば正義の味方だから!!」

「だまれ、いい わしは、騙されんわ」

戦闘start

お爺さんが現れた!!

オオカミの攻撃：お爺さんに5のダメージ

お爺さんの攻撃：お爺さんは、ライフルをぶっ放した：オオカミに100のダメージ

オオカミは、力尽きた・・・

「ちょ まじ マジやめて〜」

「このまだ動きよるかこの魔物め〜」

このままでは、マジでオオカミはお爺さんに殺されかねないので横でお爺さんとオオカミのやり取りを 少し面白おかしく見てた浦島たちが止めに入ります。

「お爺さん そのオオカミの言ってることは、本当なんですよ 僕は、旅の者でして とても疲れているので少し休みたいなと思っ  
てですね」

しかし そんな浦島の説明もなぜかやばいぐらい興奮しているお爺さんにはとどきません。

「うぬ なんだ おまえらは？ お前らもこのオオカミの仲間か？

？ ならわしが倒してやる 婆さん お前もちょっと手伝ってくれ」

「はいよ爺さん」

気がつくと 婆さんが斧を持って家から出てきました。

「ちょっと 本当に僕たちは・・・」

「問答無用!!」

戦闘start

ボスキャラ：お爺さん、お婆さんが現れた!!

(浦島) いやいやちよつとあんたらボスつすか??

お爺さんの攻撃：(お爺) ひやは〜死ね〜：お爺さんはライフルをぶつ放した：浦島に50のダメージ

お婆さんの攻撃：(お婆) お爺さんのためならえんやこら〜：お婆さんは斧でぶつた切つた：ヘンゼルに30のダメージ

(ヘンゼル) くそ〜 こつちもいくぞ〜

ヘンゼルの攻撃：ピンポンダツシュ：特に意味はなかった・・・

浦島の攻撃：亀の甲羅アタック：お爺さんに20のダメージ

オオカミの攻撃：かみつく：お婆さんに10のダメージ

(浦島) くっそ このままじゃばい

(シンデレラ) 私に任せて

シンデレラの攻撃：(シンデレラ) オーホッホ 塵と化しなさい：シンデレラは、ガラスの靴型爆弾を投げつけた：お爺、お婆に1000のダメージ

お爺、お婆は力尽きた。

「オーホッホ どう 私の見事な技は？ 見なさいこの美しき爆煙をww」

「なんか お前がいれば魔王も楽勝な気がしてきたわ・・・ つかおまえ 容赦ないのね」

浦島が呆然と爆煙を眺めながら言いました。すると その爆煙の中から

お爺さんお婆さんが出てました。

「う〜ん・・・」

「大丈夫ですか お爺さん お婆さん??」

2人が無事なのを見ると ヘンゼルが2人のところにすぐさま駆け寄ります。

「おぬしら・・・ すまん わしらは、勘違いをしておったようじや おぬしらと 戦い わしは おぬしらの中に 真の力を見た どうか許してくれ」

「そうだけ 爺さん たしかに 俺見ためオオカミだし しゃべるけど ちゃんと人(?)の話は、最後まで聞こうな」

オオカミが言います。

「うむ 本当にすまなかった お詫びとしては なんじゃが この森を抜けるためのルートが書いてある 地図をお前らに渡そう そして 疲れとるじやろうから今日は、うちに泊まっていてください」

あやうく殺されそうになったというのにそのお詫びが地図と一晩の宿だけってどうよとも少し思いましたが 4人はありがたくにその行為を受け取りました。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2828h/>

---

童話な僕とメルヘンの君

2010年11月16日03時34分発行